

# 町民文芸



## 只見短歌会

十一月詠草

大塚栄一

指導

野菜取り終へし畑に今年また薫塚積まるを飽かずに眺む

古川 英子

雨のあとに雪に変わりし山里は霜枯れもせぬ草白くなる

小倉キミ子

老いし身に疲れ残れど冬囲ひ終りし後の夕餉は旨し

馬場 八智

毒ぼつこと伝へられ来し野葡萄は実も葉も蔓も薬草と聞く

渡部ゆき子

わが膝に一人が乗れば皆が寄りそれぞれ孫の体温伝ふ

目黒 富子

秋遅き紅葉のなか初雪の降りし山並彩りの冴ゆ

新国由紀子

不意にきて消えざる友の悲しみか蛇口の水のしたたる音す

五十嵐夏美

訪ねたき人ら浮かべど今日もまた家事に追はれて暮れてゆくなり

関谷登美子

寺巡り散りくるもみぢのひとひらを拾ひて我は手にのせて見る

渡部ヨリ子

膝の手術して四日目にリハビリを行ふ姉に娘添ひゆく

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

十二月例会

目黒十一

指導

秋晴や口に唾いて釘を打つ  
すっぽりと大根抜けて覗き見る

都

里神楽ひとり三役いや五役  
曲屋の並ぶ山家に初日射す

恒 夫

ストーブの前を取り合う兄弟  
廢鶏の大根汁の塩の効き

一 穂

垣添いに菊の花さく空家かな  
朝寒や雲るガラスに孫と書き

又壺歩

佛徒なれ手を合わす事クリスマス  
父の訓何か笑えて年夜かな

洋 子

水輪幾重のどやかに添ふ番駕  
日を受けて目薬紅葉緋と映ゆる

吉 児

赤飯は「梅三郎」よ今年米  
ロングコートの若き女性や伝道師

礼

住吉の恵比寿大黒十二月  
水口の祠の前のからすうり

邦 男

つかの間の晴れ間を得たり冬仕度  
ランナーの吐く息白し並木道

信

健康の自信たっぷり今朝の冬  
着ぶくれて散歩を兼ねてポストまで

邦 夫

冬空やくたびれてきし軍手かな  
音立ててカーテンを引く寒さかな

修 一

人は死ぬものとは言えど冬紅葉  
酒飲みを見て育ちたる兔の子

笑 羊

大袈裟に丸太で囲む冬囲  
野兎も両足伸ばし眼るらん

藤 彦

白鳥の今夜の埒いづこやら  
断水や昔の清水汲みに行く

リウコ